

国立長寿医療研究センター 10周年記念式典・シンポジウムを開催

国立長寿医療研究センターは、平成26年7月21日（月・祝）、名古屋観光ホテルにおいて「国立長寿医療研究センター 10周年記念式典・シンポジウム」を開催いたしました。

その前身の国立長寿医療センターが平成16年3月1日に創設されてから、今年で10年が経過いたしました。この節目の年にあたり、現在の長寿医療研究の到達点を明らかにするとともに、今後の方向を展望するシンポジウムを開催し、当日は136名の方にご参加いただきました。



鳥羽総長挨拶



厚生労働大臣ご祝辞

（代読：佐藤医療経営支援課長）



大島名誉総長記念講演

独立行政法人 国立長寿医療研究センター

10周年記念式典・シンポジウム



桜は古来から長寿のシンボルとされています

日程 | 平成26年 **7月21日** (月・祝)

場所 | 名古屋観光ホテル3F 那古の間



独立行政法人 国立長寿医療研究センター

プログラム

式典の部

14:00 **式辞** 鳥羽 研二 (独立行政法人 国立長寿医療研究センター 総長)

14:05 **祝辞** 田村 憲久 (厚生労働大臣)

記念シンポジウム

14:10 **記念講演** 長寿での10年

演者: 大島 伸一 (独立行政法人 国立長寿医療研究センター 名誉総長)

座長: 鳥羽 研二 (独立行政法人 国立長寿医療研究センター 総長)

14:40 **招請講演** Role of NCGG in Asia Tomorrow:
Development of Geriatrics and Aging Research
アジアの未来を担う、国立長寿医療研究センター

演者: Liang-Kung Chen (国立陽明大学 教授)

座長: 鈴木 隆雄 (独立行政法人 国立長寿医療研究センター 研究所長)

15:00 休憩

15:10 **シンポジウム** 長寿医療研究の到達点と今後の方向

座長: 横倉 義武 (日本医師会 会長)

大内 尉義 (日本老年医学会 理事長 / 国家公務員共済組合連合会 虎の門病院 病院長)

15:15 **基調講演** ナショナルセンターの責務と国立長寿医療研究センターへの期待

辻 哲夫 (東京大学 高齢社会総合研究機構 特任教授)

15:40 **講演** 認知症医療・ケアの今後の課題 ～病態解明から発症予防に向けて～

森 啓 (日本認知症学会 理事長 / 大阪市立大学医学部 脳神経科学 教授)

16:00 **講演** 研究成果をどのように国民に還元するか

松尾 清一 (名古屋大学 副総長・医学系研究科腎臓内科学 教授)

16:20 **講演** 地域で治し支える医療 ～在宅医療の観点から～

新田 國夫 (全国在宅療養支援診療所連絡会 会長 / 医療法人社団つくし会 新田クリニック 理事長)

16:40 **講演** 地域包括ケアシステムの構築に向けて

宮島 俊彦 (内閣官房社会保障改革担当室長)

17:00 **閉会の挨拶** 原田 敦 (独立行政法人 国立長寿医療研究センター 病院長)

総長のご挨拶



本邦で6番目のナショナルセンターとして国立長寿医療研究センターが誕生し10年を数えました。

この間、高齢社会に対応し、「こころと体の自立を促進し、国民の健康と福祉に貢献する」という理念にむけ、医療と研究を積み重ねて参りました。

今回、センターの使命の一層の達成のため、方向性や重点目標は適切かなど、忌憚のないレビューと卓見をいただくべく、内外の識者に講演とシンポジウムをお願いしました。

独立行政法人 国立長寿医療研究センター 総長 **鳥羽 研二**

10年のあゆみ

2004年

- 国立高度専門医療センター
国立長寿医療センター開設



2009年

- 在宅支援病棟を開設



2010年

- 独立行政法人国立長寿医療研究センター開設
- 認知症先進医療開発センター、
もの忘れセンターを組織

2011年

- 認知症先進医療開発センター及び
もの忘れセンター開設
- 老年学・社会科学研究センター開設
- 第2研究棟開設



2012年

- 実験動物管理棟開設

2013年

- バイオバンク棟開設



第2研究棟



バイオバンク棟

演者



記念講演 長寿での10年

大島 伸一 独立行政法人 国立長寿医療研究センター 名誉総長

1970年名古屋大学医学部卒。社会保険中京病院泌尿器科、同病院副院長、1997年名古屋大学医学部泌尿器科学講座教授、2002年医学部附属病院院長を経て、2004年国立長寿医療センター総長、2010年独立行政法人国立長寿医療研究センター理事長・総長。2014年より同センター名誉総長。2009年国立大学法人名古屋大学名誉教授。

2004年3月に6番目のナショナルセンターとして発足した国立長寿医療センター（当時）は10年が過ぎた。センターは、国立療養所中部病院を引き継いだということもあり、高齢者医療について、専門的に研究できる体制を十分に備えているとは言いがたい状況にあった。私は就任後、何よりもまず、センターの理念の策定を幹部職員にお願いした。数ヶ月の議論の後に作られた理念は素晴らしいものであった。しかし、続いて理念を実現するための行動計画の策定をお願いしたができなかった。二年後に、独立行政法人化が決まり、組織が変わる転機となった。その後の数年間は、独立行政法人化に向けての基盤体制の構築に費やされ、執行部体制も変わった。独立行政法人化後は、新しい組織と体制のもとで、国の方針と理念に沿った行動計画を作り、その実現に向けて進んでいる。10年間を振り返ってということで、外からは見えにくい部分も含め話してみたい。



招請講演 Role of NCGG in Asia Tomorrow: Development of Geriatrics and Aging Research アジアの未来を担う、国立長寿医療研究センター

Liang-Kung Chen 国立陽明大学 教授

MD, PhD, FRCP (UK)
Professor, Aging and Health Research Center, National Yang Ming University
Director, Center for Geriatrics and Gerontology, Taipei Veterans General Hospital

アジアは地球上、最も高齢化の速度が早い。老年医学の普及はきわめて遅れている。NCGGは、国境を越え、国の政策医療に貢献し、国際研究をリードし、新しいアジア型ケアモデルを提唱できるセンターである。このようなセンターはアジアでは希少で、アジアの数少ない良質な機関と連携して国際的な権威を招聘、交流すべきである。共通する課題の領域は、フレイル、認知症、ケア、健康増進/介護予防である。センターは将来を背負って立つ、老年医学の若手の育成も担ってきた。今後は、リーダーを世界に売り出す役目も果たして欲しい。我々は、アジアの未来の高齢化を担う旗手として、国立長寿医療研究センターに期待している。



基調講演 ナショナルセンターの責務と国立長寿医療研究センターへの期待

辻 哲夫 東京大学 高齢社会総合研究機構 特任教授

1971年東京大学法学部卒業後、厚生省（当時）に入省。老人福祉課長、国民健康保険課長、大臣官房審議官（医療保険、健康政策担当）、官房長、保険局長、厚生労働事務次官等を経て、2009年東京大学高齢社会総合研究機構教授、2011年同機構特任教授、現在に至る。厚生労働省在任中に医療制度改革などに携わった。著書として、「日本の医療制度改革をめざすもの」（時事通信社）「超高齢社会 日本の挑戦」（株式会社 時評社）等がある。

後期高齢者の急増等の我が国の医療を巡る環境変化は、医療政策のパラダイム転換を求めている。治す医療を基本とする病院医療を中心に形成されてきた現在の医療システムの延長だけでは、環境変化に対応しきれない可能性が高い。高齢者を生活者として支える医療システムが必要となっている。この転換のためには、政策医療が果たす役割は大きい。とりわけ、ナショナルセンターは、各分野の我が国医療の頂点に立つリーダーを迎え国の政策医療を担う中核機関であり、既存のしがらみにとらわれない先を見越した活動が求められている。国立長寿医療研究センターは、超高齢社会を迎えた日本において、特に重要なナショナルセンターであると確信する。今後、同センターがさらに活躍し、我が国医療政策の最先端を歩まれることを期待する。



講演 認知症医療・ケアの今後の課題 ～病態解明から発症予防に向けて～

森 啓 日本認知症学会 理事長/大阪市立大学医学部 脳神経科学 教授

1974年 大阪大学 理学部卒業
1979年 東京大学 大学院修了
1982年 福井県立短期大学・第一看護学科 助教授
1986年 東京都老人総合研究所 主任研究員
1987年 ハーバード大学プリガム病院 リサーチアソシエート
1991年 東大・医・脳神経病理学 助教授
1992年 東京都精神研・分子生物学 室長
1998年 大阪市立大学・医学部・脳神経科学 教授
2009年～日本認知症学会 理事長

厚生労働省の「認知症施策推進5か年計画（通称、オレンジプラン）」では、7つの対策項目が進行中である。それらは、地域での生活を支えるケアパスの充実を理念として、1. 認知症ケアパス、2. 早期診断・早期対応、3. 医療サービスの構築、4. 介護サービスの構築、5. 生活支援の強化、6. 若年性認知症施策の強化、7. 医療・介護サービスを担う人材の育成からなる。ロンドンでの認知症サミット2013でも、産学協同による医学医療と介護への研究と取り組みが推進され、国際協力が共同声明として謳われているように、本邦でのオレンジプランにおける早期診断や医療の側面を拡充することで、国家戦略としての位置づけに限りなく近づけるのではないかと。そのための体制の構築と関係者各位の協力は、従来より一層必要となってきている。その結果、先進医療から地域医療、さらに地域包括支援センターまでの多職種協働作業がシームレスで実現すると確信している。



講演 研究成果をどのように国民に還元するか

松尾 清一 名古屋大学 副総長・医学系研究科腎臓内科学 教授

2007年4月から2013年3月まで名古屋大学医学部附属病院の病院長、2009年4月からは大学経営に携わる副総長も勤める。2014年4月からは名古屋大学が文部科学省の革新的イノベーション創出プロジェクトに採択されたことに伴い、産学官連携研究拠点としての未来社会創造機構 機構長を併任し活動している。

主要論文数に占める我が国の位置は基礎論文が世界第でもトップレベルであるのに比して、臨床論文は20位以下である。また、公開された国際特許 (PCT) は欧米企業に比べて日本の製薬企業は大きく立ち遅れ、新薬の上市順位も我が国は欧米職の後塵を拝している。従って、我が国は、基礎研究力はあるがその成果が患者に届くまでのプロセスが問題であるとされてきた。加えて最近、研究の科学性、倫理性、透明性に関するコンプライアンスの問題が次々と指摘されている。一方でこれらの諸点を担保しながら臨床研究を推進する動きが加速している。TR拠点、臨床研究中核病院等の拠点整備とネットワーク化、従来多省庁にまたがっていた創薬や革新的医療機器の創出に関する支援体制の統合と効率化、審査の迅速化や各種指針・規定の整備、等である。我が国における最近の動きと中部地区での先駆的取り組みである中部先端医療開発円環コンソーシアムについて報告する。



講演 地域で治し支える医療 ～在宅医療の観点から～

新田 國夫 全国在宅療養支援診療所連絡会 会長／医療法人社団つくし会 新田クリニック 理事長

1967年早稲田大学第一商学部卒業。1979年帝京大学医学部卒業、帝京大学病院第一外科・救急救命センターなどを経て、1990年東京都国立市に新田クリニック開設 在宅医療を開始。1992年医療法人社団つくし会設立。理事長に就任し現在に至る。現在、日本臨床倫理学会理事長、全国在宅療養支援診療所連絡会会長、福祉フォーラム・東北会長、福祉フォーラム・ジャパン副会長、北多摩医師会会長。〈主な著書〉「安心して自宅で死ぬための5つの準備」主婦の友社、「家で死ぬための医療とケア-在宅看取り学の実践」編著 医歯薬出版、
「口から食べるを支える-在宅でみる摂食・嚥下障害、口腔ケア」編著 南山堂、「在宅医療午後から地域へ」日本医師会雑誌、「食べることの意味を問い直す」簡クリエイツかもがわ

日本の高齢化は1980年代は、先進欧米諸国において遅れていたのが、2012年を境としてトップに躍り出ました。この間、1980年から診療報酬の点数として在宅点数が始まります。そして2000年に原型が完成されました。この間の日本の高齢時代に伴う問題は、多くの点で議論されました。この中で2015年の地域包括ケア研究会報告書が出され高齢者の問題が本格的になります。地域包括ケアの中に医療が明確に位置付けられました。医療は慢性疾患モデルから派生した在宅医療モデルです。現在、病院の世紀の終了といわれる中で、病院の世紀が過ぎ去り在宅の世紀に向かっているといえるでしょうか。日本には病院依存が続いているのも事実です。在宅医療の普及は、医療のあり方を基本的に問い直す作業です。病院で治す医療は高齢社会においては長寿を享受しますが、健康寿命と介護寿命の格差を広げました。要介護になった老いは主体的に生きる希望を客体化され死を迎えることになります。1960年代から2000年、わずか40年間の間に、日本人には家で死ぬことが当たり前と感じていた人生の終わり方が、こうも簡単に病院死が増え、変わるとは思ってもいなかったと思います。たとえ要介護状態となったとしても、その生活を支える在宅医療が、その人の生き方を変え、この数年増えている在宅で介護する、暮らす、その結果、看取る死はおそらくそれが改めて感じる人の生と死であり、人生の終わり方が変わることは、生き方もまた変わることになります。今何故在宅かは先進欧米諸国の中で超高齢社会を迎えた日本がなすべき新しい創造だと考えます。



講演 地域包括ケアシステムの構築に向けて

宮島 俊彦 内閣官房社会保障改革担当室長

1977年3月東京大学教養学部教養学科卒業。1977年4月厚生省入省、厚生労働省大臣官房審議官(保険・医政担当)、厚生労働省老健局長など歴任。2012年9月厚生労働省退職。現在、岡山大学客員教授、介護経営学会理事、内閣官房社会保障改革担当室長(非常勤)
〈著書〉「地域包括ケアの展望」宮島俊彦著 社会保険研究所 2013

超高齢化社会に向け、医療・介護の体制は、病院完結型から地域完結型へ大きく方向転換しようとしている。この方向は、昨年8月の社会保障制度改革国民会議報告で示され、今年の国会では、医療介護総合確保法案(略称)が成立し、いよいよ、全国的に地域包括ケアシステムの構築が進められようとしている。

地域包括ケアの実現のためには、①保健・予防をどのように実現していくか ②自立支援に資するサービスをどう実現していくか ③医療と介護の連携をどのように確保するか ④生活支援・福祉サービスの提供体制はどのようにしていくか ⑤住まいの確保にどのように取り組んでいくか、という5つの課題があるが、その改革方向を解説する。あわせて、「認知症がある人に関する基本法」について、私見を述べる。

祝 辞

Dear Dr. Ohshima,

It is a great pleasure to receive your mail, which brings to my mind sweet and bright memories of my recent visit in Japan.

I was absolutely impressed by the quality and depth of research on aging that is developing in your country and especially the clear attempt to pursue research that connects biological mechanisms with the experience of living in old age. This strong translational perspective will certainly result in better quality of life of the older population all over the world.

I wish you a great success for the celebration of the 10th Anniversary Meeting of the National Center for Geriatrics and Gerontology, Japan.

There is a lot to celebrate for the past work and there many elements that predict an even brightest future.

Best Regards

Luigi Ferrucci
Scientific Director of the National Institute on Aging.

Baltimore, MD, USA

Dear Dr. Ohshima,

As IAGG Past President, it is an honour for me to write this letter in view of the 10th Anniversary of the National Center for Geriatrics and Gerontology, Obu, Japan. We would like to congratulate you for this celebration that will take place on July 21, 2014 and that will surely be a unique occasion to highlight the work of your teams realised over the past decade and focussed on many age-related issues. The world population is aging and it becomes important to push forward research in this field for the well-being of older people. To this effect, may your Center continue to develop international relationships with academic leaders, university scholars, high-level researchers, policy makers etc, in order to promote Gerontology and Geriatrics around the world.

Your Center is dedicated to advanced and specialized medicine and we have had many opportunities to work together and exchange on different aspects such as Alzheimer's Disease, Dementia, Frailty and Sarcopenia. These meetings included:

- International Symposium on Geriatrics and Gerontology, Aichi, Japan, in June 2013
- IAGG's Master Class on Aging, in Beijing, China, in January 2013
- International Conference on Frailty and Sarcopenia Research, in Barcelona, Spain, in March 2014
- a visit of a NCGG delegation (with representatives from Tokyo, Kyoto and Nagoya Universities) to the Toulouse University Hospital, in March 2014
- and more generally, within the IAGG GARN Network, your research center being a full member since April 2012.

We encourage your Center to continue making major contributions to gerontological and geriatric research and we plan to build some joint research program between your center and the Toulouse Geronotopôle on Frailty, Sarcopenia, Alzheimer prevention, and Cognitive Frailty. We will be happy to welcome a representative from Nagoya to be part of the Editorial Board of the Journal of Frailty and Aging (JFA) and of the Journal on Prevention of Alzheimer's Disease (JPAD).

*We wish you much success for your Center's anniversary meeting.
Sincerely yours,*

Bruno VELLAS, MD, PhD
IAGG Immediate Past President
IAGG GARN Director
Head of the Geronotopôle, Toulouse University Hospital

Dear Dr. Ohshima,

Last year, I had the great opportunity of visiting the National Center for Geriatrics & Gerontology, you have been chairing. I had the great honor of being invited to give a lecture in front of your teams, who positively interacted with me.

I was really impressed by the very high standard of your hospital wards and the individual quality of the health care professionals involved in caring the old patients under your responsibility.

But I was more impressed by the scientific level of your Gerontology & Geriatric Research Institute team; I listened to several lectures from scientists of your Institute in different International congresses and I was always very interested by the originality and great precisions of the reported studies.

Translational research is the most important character of the work performed by the National Center for Geriatrics and Gerontology, showing how accurate and updated your Center is.

I do congratulate you and all your staff members for such bright and successful achievements.

I wish an outstanding success of the 10th Anniversary Meeting of the National Center for Geriatrics and Gerontology.

With my personal and warmest regards

Dr Jean-Pierre MICHEL
Honorary professor of Medicine Geneva University (CH)
Honorary professor of Limoges (F) and Beijing (Cn) Universities
Adjunct professor at Mc Gill University (Ca)
Former head of the Geriatric Academic department Geneva University Hospitals (CH)
Full Board member of the French Academy of Medicine-Paris (F)
WHO expert in the programme "Aging and life course"- Geneva (CH)
Immediate Past President of the European Union Geriatric Medicine Society-Vienna (A)

Dear Dr. Ohshima,

I am delighted to congratulate the National Center for Geriatrics and Gerontology, Japan on your 10th anniversary. Under your excellent leadership, the National Center for Geriatrics and Gerontology, Japan has become a world class institution and leader in care, education and research.

I am also delighted that we have been able to collaborate on various projects in the past years and I do hope we can continue. In particular, along with another Professor in my department, we are leading the Canadian Team for healthcare/system improvement in dementia care and are examining and evaluation best practices and models in primary and specially care for the detection, diagnosis, treatment and management/follow-up of patients and families with Alzheimer's Disease and related disorders.

I think this would be an excellent area for collaboration and I would be honoured if you, on behalf of the National Center, would accept be part of our International Advisory Council.

Best personal regards and again congratulations on this milestone achievement.

Howard Bergman MD, FCFP, FRCPC
Chair, Department of Family Medicine | Professor of Family Medicine, Medicine and Oncology | The Dr. Joseph Kaufmann Professor of Geriatric Medicine | McGill University
Directeur, Département de médecine de famille | Professeur de médecine de famille, de médecine et d'oncologie | Titulaire de la Chaire Dr. Joseph Kaufmann en gériatrie | Université McGill